月刊漫画

680yen

1964年11月10日
第3種郵便物認可
1966年4月5日
国鉄首都特別級承認雑誌2343号

1996年4月1日発行
第33巻・第4号
通巻374号
（毎月1日発行）

publication bizarre bande reunie

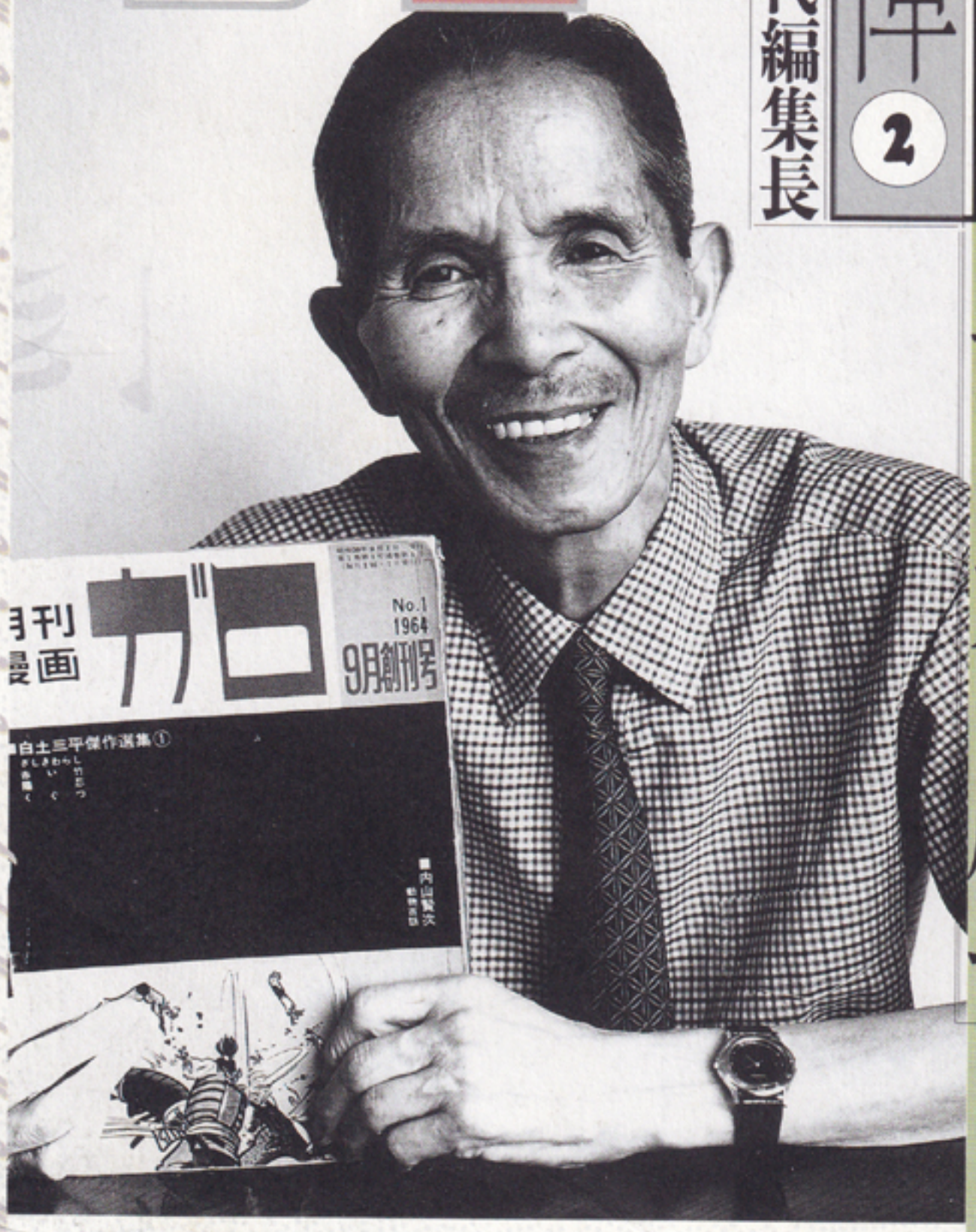
# GARO

1996 april 4

## 追悼 2

## 【ガロ】・初代編集長

# 長井勝一




monthly comic magazine

# 長井さんに選ばれて

一九六五年、高校2年の秋、学校の近く、武蔵小山の古本屋さんの店先で、はじめて「ガロ」を知りました。新人作家募集の記事があり、記憶では「個性的なことを第一に選考し、技術的には下手でもかまわない」というようなことが書いてあったと思います。「これはいけるかも」と思いました。ただ、時代劇画が載っていて（カムイ伝）、なんだか「ちょっと違うかも」という感じもしましたが、「絵が下手でよくて、個性的ってことなら、おれにピッタシじゃん」「ここだな」投稿しようと思いました。古本屋さんにお金を払って買って手にした「ガロ」は、ほこりっぽいような、カビ臭いような、昔の雑誌独特のちょっと酸っぱいような、そんな香りがするような気がしました。以来、この臭いが僕にとっての「長井さんの臭い」になりました。

長井さんとお会いした回数は、ほんの少ししかありません。お話した会話の量もわずかです。でも、僕にとって絶対的な人なのは、長井さんが僕のマンガを入選作品として拾い上げてくださったからです。「僕はガロの長井さんに選ばれた才能なんだ」この幻想をコケの一念で抱き続け、今日まで生きてきました。マンガにしがみついて生きてこられた根拠は、ほとんどこの一点でした。

最初に投稿するとき、原稿を二作持って直接青林堂へ出かけました。郵送ということでも良かったのでしょうが、マンガ入門とかいう本などで漫画を投稿するときは原稿を持っていくと編集の人が見て、あれこれアドバイスをくれたり…というシーンが頭にあったからです。青いタイルがはってあった建物だったような気がします。細い階段をのぼりました。緊張して足がふるえ気味でした。「新人募集に応募したいんですが」と言うと誰かが「はい、じゃあ、お預かりします」それで終わりだったと思います。又ふるえ気味の足で階段をおり、振り向きもせずお茶の水の駅へ向かいました。「やれ、やれ、渡した」「こんなものなのかなぁ」「まあ、こんなもんなんだろう」高校3年になる春休みの平日でした。その時、長井さんが部屋に居らしたのかどうかも知りません。二ケ月ほどして、入選作品として八月号に掲載します、と書かれたハガキが届きました。「やったぜ！やっぱりおれには才能がある」の思いの数ヵ月でした。その後、次回作を期待するというお便りを、ゲラ刷りに添えたり、原稿料の現金書留に添えたりして何度かいただきました。でも描けませんでした。大字受験ということもあったのですが、はっきり言って、アイデアが出ませんでした。青林堂へは行きたかったのですが、期待される次回作を持たずには行けず、一年以上が経ってしまいました。

一浪の後、大字が決まった春、やっと次の一作ができ、青林堂へお持ちしました。しっかり認識して長井さんとお会いしたのは、その時が初めてだったと思います。長井さんは、なにか鼻の奥をくんくんいわせるような感じで原稿を読まれていたと記憶します。それで「ああ、じゃあ何月号に載せますので」そんな感じでした。「又どんどん描いて」と言われてもアイデアが出ず、描けなかったので原稿をお持ちするのは年に一回ぐらいでした。そしてくんくん読んでいただいて、帰るという感じでした。その後「これは！」という傑作は描けませんでした。結論から言ってしまうと、現在も僕は入選作で載せていただいた「宇宙の出来事」以上のマンガを描かけていないように思います。でも長井さんは、お持ちした原稿すべてを「ガロ」に載せてくださいました。

大学は浪研で遊び、卒業はしたものの、そのままぐだぐだと似顔絵や学習マンガで細々と稼ぎを始めました。そして大した仕事もないまま、結婚をしてしまうのですが、その披露宴に長井さんにご出席いただきました。年に一回くらいフラッとマンガを持って行くだけなのに、披露宴でなにか話せと言われて長井さんも困ってしまったろうと思います。でも、マンガで暮らしていくと家を出ることにしたものの、ほとんどマンガの仕事などなかったわけで、出席をお願いできる編集者は実のところ二人ぐらいしかいなかったのです。ご迷惑をおかけしました。申し訳ないついでにスピーチの内容も忘れてしまいました。ただ「すいません。

わけわかんない所へ無理に出席お願いしまして。ホント、すいません」と頭の中で考えていたことだけは憶えています。振り返るとそれ以降ガロに持っていくマンガを描けていないのですね。長井さんとも結婚式以後、「木造モルタルの王国」が出るまでご無沙汰になってしまいました。

正にそれが才能がないということの証しだったのでしょうが、「独創的でおもしろいマンガ」はなかなか描けませんでした。学習ものとかカットなど「マンガ的な仕事」で、かろうじて喰いぶちを稼ぐことはできましたが、長井さんのところへ持っていっても恥ずかしくないという作品は描けませんでした。

「マンガ的な仕事」も一時休業し、三十歳から七年間ほど、長野の方で木工芸の仕事を試みていた頃、ガロ二十年史「木造モルタルの王国」に僕の入選作品を収録していただきました。それを見ていると、またあの「幻想」が再燃してきてしまいました。「僕はガロの長井さんに選ばれた才能なんだ」「やっぱり僕はマンガを描きたいんだ、マンガしかないんだ」「マンガ家になりたい」

三十八歳の時、ガロをのぞけば初めて、雑誌社にマンガの持ち込みということをしました。プロレスのギャグマンガで、少し使ってもらいましたが、そうは売れませんでした。一年後、芳文社の古島當夫編集長に拾われ、アットホーム四コママンガでやり直すことになりました。ペンネームも田代しんたろうと変え、絵柄もファミリー向けに作り直しました。一九八七年のことです。少しずつ仕事も増え、なんとか「いわゆる漫画家」のはしくれになることができました。

一九九二年、長井さんから山中さんに青林堂をバトンタッチされるというパーティーがあり、出かけました。実は「木造モルタルの王国」の出版記念パーティーにも出席はしていたのですが、気後れがして、長井さんにお声をかけられず、帰ってきていました。バトンタッチのパーティーも、面識のない方たちばかりでちょっと困っていました。でもその日は「どうしても長井さんに一言かけなくちゃいけないぞ」と自分に言い聞かせていました。パーティーが始まり、長井さんが入場されました。高信太郎さんの司会で会は進み、しばらくしてなんとなくワイワイした感じになってきました。僕はいつ長井さんに近づいたらいいものか、タイミングをつかめずにいました。その時長井さんの様にいらした香田さんが僕の方を見て、長井さんに何か一言かけられました。長井さんもこちらを向かれました。僕に気づかれたのか、僕の近くの別の方に気づかれたのか、わかりませんでしたが、「今しかないぞ、ほら行け！」長井さんに向かって歩いていきました。「おかげさまで、なんとかマンガで飯を喰っています」と言うと、長井さんは「良かったねぇ。ほんとに良かったねぇ」と言ってくださいました。あと一言二言ことばを交わしたかもしれませんが、ほとんどそれだけでした。その時はもうそれで充分だという気持ちでした。

でもね、長井さん。僕は「自分はガロの長井さんに選ばれた才能だ」という思い入れだけを頼りにやってきたんですよ。「長井さんが僕を認めてくれている」それが支えだったんです。時間が経つにつれて、世の中にはもっともっとすごい才能がたくさんいて、僕の思いつきの能力なんかは、それほどのものではないんだということもだんだんわかってきました。でもそれじゃあ、やってられないから、マンガが描けないから、「あの時長井さんに選ばれた」という過去を心の拠り所として生きてきました。

長井さんが現実にはもういらっしゃらないというのは、とても寂しいことです。

「いつか又ガロに載っても恥ずかしくないマンガが描けたら、長井さんにみてもらおう」と思っていました。そういうマンガが描けるかどうかわかりませんが、もう長井さんには見てもらえないのですね。でも、きっと描きます。「独創的でおもしろいマンガ」きっと描きます。僕の心のある部分は、高校時代となんにも変わっていず、そこには長井さんがいつもいらっしゃいます。だから大丈夫です。いつかきっと、期待される次回作、描いてお見せします。